

ギュスターヴ・ジェフロワ計画によるタピスリー連作「フランスの諸地域と諸都市」  
—アドルフ・ヴィレットに基づく《パリ万歳》を中心に—

岡坂 桜子 東京藝術大学

19世紀後半から20世紀初頭のフランス美術界において、美術批評家として活躍したギュスターヴ・ジェフロワ(1855-1926)は、1908年に国立ゴブラン織製作所所長に就任し、13点のタピスリーから成る連作「フランスの諸地域と諸都市」を計画した。本発表では、計画の出発点となった1点《パリ万歳》を中心に上げ、本連作が企画された意図を同時代の文脈に即して分析する。

同時代の作家を多数起用し、フランス各地の地理的・風俗的特徴をタピスリーによって描き出した本連作は、ジェフロワの意欲的かつ中核的な計画(c. 1908-1930)であったにもかかわらず、ジェフロワの貢献を主として著名な先進的芸術家の起用の点でのみ評価する先行研究においては看過されてきた。パリの擬人像を中心に様々な寓意的モチーフで構成される《パリ万歳》の図像は、そうした「近代化されたタピスリー」とは明らかに性格を異にする作品である。20世紀初頭にタピスリー芸術の刷新を求められていたジェフロワが、就任後間もない段階で、なぜこのような連作を企画する必要があったのだろうか。

そもそも所長就任の人事は、ジョルジュ・クレマンソー(1841-1929)第一次内閣(1906-1909)において決定されたものであった。クレマンソーは、普仏戦争およびパリ・コミューンの混乱のなかで成立した第三共和政において、幾度となく訪れた国内分裂の危機を調停しようと努めてきた政治家であり、1908年当時は、アルザス＝ロレーヌ割譲という忘れがたい過去を抱えつつ対独強硬策を推し進めていた時期にあたる。おそらくクレマンソーの意を受けたジェフロワは、風刺画家アドルフ・ヴィレット(1857-1926)に下絵制作を依頼し、この《パリ万歳》と題した構図において、無名の労働者や兵士たちの働きに支えられながら、繰り返されてきた革命と政治的不安定の上に、ようやく現在のパリの安定がもたらされていることを視覚化した。一方その様式は、風刺画の世界で活動してきたヴィレットの個性をよく表しており、そうしたヴィレットの描写によってこそ、ジェフロワは、《パリ万歳》の大画面に込められたメッセージを観者である大衆に効果的に伝えることができると考えたのではないか。そのメッセージとはすなわち、共和政の下に団結する国家フランスの永続性の希求に他ならない。

《パリ万歳》を核とする13点のタピスリーは、多様な文化や風土を内在させながらも、一つの国家として統合されたフランスの姿を連作という形式で提示する。連作「フランスの諸地域と諸都市」は、クレマンソーの政治的意図と、所長ジェフロワに課されたタピスリー芸術の威信の存続という使命が交差するところに位置しているのである。

(おかさか・さくらこ)